

『続の原』輪講 発句

二〇一四年（平成二六）十一月八日（土）の例会にて発表

担当 文華女子中学高等学校 山形彩美

○春25番の発句

行駒の足にまつはる胡蝶かな

不卜

〈作者について〉

作者の不卜は既出。春14番を参照のこと。

〈語注〉

- ・「胡蝶」によって、春。「胡蝶」については春22番の語注参照。「花」ではなく「駒」と組み合わせて、飛び回る蝶の軽快な動きを詠んだところが俳諧であろう。飛び回る蝶を詠んだ発句の例に「猫の子のくんづほぐれつ胡蝶かな 其角」（『炭俵』上巻 春之部発句）、「上（野）のより帰り侍るとて／酒くさき人にからまるこてふかな 嵐雪」（『其袋』春之部）がある。また、連句の例に「をどりはねつつ舞遊（まひあそ）ぶ春 貞徳／駒つなぐ花の木陰の蝶雀（くちすずめ） 重頼／万事に物のいそがしき比 重頼」（『犬子集』巻七 春）がある。
- ・行駒 歩を進める馬。『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店 平成十一年）に「詞書には「馬」、和歌本文には「駒」を用いるというように、「駒」はより雅びな言葉としての認識があった」とある。本句においては「駒」と「胡蝶」が雅語といえよう。「行駒の口引（くちひき）とむるなづなかな 常好」（『犬子集』巻一 春）、「行こまもつなぎとむるやはるの水 紹巴」（『大発句帳』春部）、「甲斐の国山中（やまなか）に立寄（たちよ）て、／行駒の麦に慰むやどり哉」（『野ざらし紀行』）では駒が一ヶ所に止まっているのに対し、「行こまのあととはなつ野の木陰哉 紹巴」（『大発句帳』夏部）や本句の「駒」は動いている。ここは、春の野辺を勢いよく駆ける「春駒」のイメージをもって読むのがよいだろう。
- ・足にまつわる 足にまとわりつく。蝶が、馬の足の周りを行ったり来たりしながら飛んでいるさまをいう。元禄二年六月成「有難や」歌仙（『俳諧書留』所収）では犬がまとわりつくさまを次のように詠む。「髪あふがするうすもの露（つゆ） 翁／まつはるる犬のかざし（かざし）に花折（はなを）て 露丸／的場（ま）のすゑ（末）に咲（さ）る山吹 釣雪」。

〈句解〉

「進み行く馬の足に蝶がからみついていることだ。」

- ・「蝶」と「駒」で春らしさを詠んだ句。句の基になった画があるのではないかとの意見が出されたが未詳。また、典故があるのではないか、例えば『源氏物語』「胡蝶」

の巻はどうか、といった意見も出た。しかし「胡蝶」の巻に蝶が馬の足にからみつく場面はない。したがって、「胡蝶」は『源氏物語』の巻の名でもあり、「駒」の語と共に雅語として用いることで優美な句に仕立てようとしている、と解釈する。

〈配列〉

22番から本句まで、蝶の句が四句連続する。「雨や風に翻弄されることなく、元気に飛び回る蝶」に加え、本句では元気に駆ける「駒」の姿も描く。

○春26番の発句

小笹原うごくを雉子の姿哉

由之

〈作者について〉

作者の由之については、生没年ほか未詳。『犬子集』（寛永十年成）、『誹諧発句帳』（寛永十年刊）、『夢見草』（明暦二年刊）などに入集。

〈語注〉

・「雉子」によって、春。雉は山野に生息する。「はるののにあさるきぎしのつまごひにおのがあたりをひとにしれつつ」（『万葉集』・春・一四四六・大伴家持）、「春の野のしげき草葉のつまごひにとび立つきじのほろるとぞなく」（『古今和歌集』・雑・一〇三三・平貞文）、「つまごひを人にやつつむ山本のかすみぐれにきぎす鳴くなり」（『新拾遺和歌集』・春・六三・光厳院御製）のように、妻恋するところを人に知られてしまう雉が詠まれてきた。「春の野に家族を呼ぶ鳴き声で存在を知られる習性」（前掲『歌ことば歌枕大辞典』）を詠むのが本意であることから、和歌や俳諧ではしばしば雉子の声が詠まれてきたが、本句では声を詠まず、「小笹原」が動いたことから雉子の存在を感知している。

・小笹原 おざさはら（「おざさわら・をざさのはら・をざさがはら」とも）は笹が生い茂っている原をいう。「もえ出づる草葉のみかはをざさ原駒の景色も春めきにけり」（『詞花和歌集』・春・一三・覺雅）。

・うごくを 動くのを。後代の用例だが、『庭竈集』上（享保十三年刊）に「潭荷葉動くは是れ魚の遊ぶなり」を前書として「蓮の葉の動くを泛子の相図哉 問景」が見える。この前書は『和漢朗詠集』蓮に「岸竹 枝低れり 応に鳥の宿となるべし。潭荷葉 動くは是れ魚の遊ぶならん」とあるのをふまえており、魚の姿は見えていないが蓮の葉の動きによって水面下で魚が遊んでいるさまを想像している。本句でも雉の姿は

見えていないと思われる。

〈句解〉

「笹の葉が動いたのでそこに雉子がいることよと思う。」

・「むしられぬさきにやけ野の雉子哉 利清」（『犬子集』巻一 春上）、「躑躅より若葉に移ル雉子哉 黒羽 桃雪」（『陸奥衛』一）、「うつくしき顔かく雉子の距かな

其角」（『其袋』春之部）のように雉の姿を詠んだ句例も見出せるが、ここでは雉の姿が見えていないと解する。その理由は「うごくを」の〈語注〉に記した。茂みの中で雉子が動いたとすれば、その雉は妻恋の最中であつたのかもしれない。葉の動きから雉の存在を感知したのは、小笹原に差し掛かった人であろう。「かり人のいる野の雉子妻こひてなく音ばかりに身をやかへてん」（『夫木和歌抄』・春・一七七三・寂蓮法師）のように、雉と狩り人を併せて詠む例は多数見られ、笹の葉の動きを見逃さなかつた人物は雉子を探していた猟師と考えられる。あるいは「野径雉／ 真柴もて草葉そよがす山人のおりくる野べに雉立つなり」（『草根集』・一七二二・正徹）、「雉／たび人に宿かすがのの草まくらともに朝たつきじのこゑかな」（『晚花集』・春歌・五一）のように、雉を感知したのは山人や旅人とも考えられる。いずれにせよ、緊迫感の漂う句である。

〈配列〉

蝶から雉子へ、動く主体が変化した。25番の長閑な雰囲気に対して26番は緊張感を伴う。

○春27番の発句

おはれ来て葛につまづく雉子哉

一桃

〈作者について〉

作者の一桃は既出。春23番を参照のこと。

〈語注〉

・「雉子」によつて、春。きぎす、と訓む。「雉子」については春26番の語注に記したが、そこで言及した妻恋の場面の他にも、野山を焼くころに妻子を思つて鳴く雉子が句に詠まれる。『山の井』（正保五年刊）「雉子」の項に「きじ あさるきぎす 子おもふ つまこふ やけ野 禁野／野山やく比は足よはの妻子をのけかねて、道のけんそを

けんく／＼となきかなしみ、鷹たかにあふても獵師れうしを見ても、涙のほろ／＼隙ひまもなく、万おそれおほく哀あはれなる物とぞいひならはし侍る。されば子を思ふきじは涙のほろ／＼とも、鷹にあふてけんを取るとらゝなどもいへり／子を思ふきじはなみだのほろ／＼哉／子ゆへにややけ野の雉きじのこがれ死 定次」とある。本句は野山を焼く火、もしくは獵師や鷹に追われる雉子を詠むか。「独り茶をつむ藪ひしやくの一家 芭蕉／日影山雉子の雛をおはへ来て 叩端／清水をすくふ馬柄杓ばびしやくに月 閑水」(「つくづく」と)歌仙 貞享二年『熱田三歌仙』所収)では雉子の雛が追われている。ここは「つまづく」とした点が俳諧で、追われてつまずいたのはあるいは雉子の雛かもしれない。

・おはれ来て 追われてきて。野山を焼く火、もしくは獵師や鷹にでも追われたか。

・葛 マメ科のツル性多年草で山野に生える。ツルは樹木等によじ登り、また、地面をはって広がる。茎は長さ十メートル以上に及び、全体に白または褐色の毛がある。葉は長さ十〜二十センチメートルで長い柄を持ち互生し、三個の小葉に分かれる。ここは春の葛なので、若葉である。とはいえ、長いツルに葉がたくさんついていることに変わりはない。追われている雉子が、急ぐ余地地面にはびこっている葛に足を取られたさまを詠んだ。葛は秋の七草の一つでもあり、葉の裏は白く見え、葉が風に翻ると目立つところから「裏見」と称し、和歌などで「恨み」にかけて詠まれる。若葉の場合、葉裏の白は目立たない(『図説俳句大歳時記』春 角川書店 昭和四十八年)が、ここでは雉子が葛に足を取られたことを恨みに思っているだろうと見る第三者の視点を詠むか。『はなひ草』では「四月」の項に「玉卷葛」が載り、支考の句に「善通寺西行松」と前書して「松を見て身をしる葛の若葉哉」(『六華集』)があるも、雉が葛につまづくことを詠んだ句例は未見。

〈句解〉

「追われてしまつて葛につまづいた雉子であることだよ。」

・「おはれ来て」という切迫した状況を「つまづく」で受けた点、「雉子」や「葛」の若葉という美しく雅なものに「つまづく」を取り合わせた点が俳諧といえる。葛につまづいた雉子は、葛が進行を妨げることが「恨み」に思っているだろう、とする第三者の視点が滑稽味を醸し出す。

〈配列〉

26番と同じく「雉子」を扱うが、そこで生じた緊迫感「葛につまづく」という表現によって消散し、かえって27番には拍子抜けしたおかしさがある。26番の句では見えなかった雉子の姿が、27番の句で見えた。

○春28番の発句

鳴入りて何れか負ん友雲雀

琴風

〈作者について〉

作者の琴風は、寛文7（1667）〜享保11（1726）。摂津国の人。俳諧作者。江戸へ出て不卜門、のち其角門。編著『瓜作』、『豊牛鼻』、『琴風落髮賀』。追善集『春の水』（千魚編）。『俳文学大辞典』（角川学芸出版 平成二十年）「琴風」の項（石川八朗氏筆）を参照。宇都宮讓氏「『続の原』考」（『連歌俳諧研究』八十三号 平成四年七月刊）において、琴風は其角と調和の両派に係わる俳人と目される。

〈語注〉

・「雲雀」によって、春。「雲雀」は、晴れた空に高くあがり鳴く鳥として和歌や俳諧に詠まれる。「ひばりは子を思ふことの切なる物也。空にあかりて下にある巢をまもるよし也」、「ひばりは空にては鳴て草に入てはなかなぬよし読り」（『涙のまさご』春「雲雀」）。『時勢粧』第三に「雲雀」と前書して「見上るは富士を廿のひばり哉」とあり、天高く昇りゆく雲雀が詠まれている。

・鳴入りて 激しく鳴いて。雲雀が「鳴入」という表現を用いた句例は本句以外に未見。『続虚栗』夏に「啼入て音もなしそれは時鳥 嵐雪」とある。これは嵐雪が、母を亡くした其角に手向けた追悼句で、ひどく鳴いて声が聞こえなくなったのは時鳥だが、あなただの泣き声は止んでいないことでしょうかの意。

・何れか負ん （群れの中で）どの鳥が負けるだろうか、いや、どれも負けはしない。

・友雲雀 雲雀が何羽もいるさまをいう。『毛吹草』巻七に「花染のきぬのぬひめも垢なれて／よき音を出す雲雀何疋／響はむ花の春駒あと先に」。

〈句解〉

「激しく鳴いて、どの一羽も負けはしない友雲雀よ。」

・本句は、繁殖期を迎えた複数の雲雀の雄が互いに縄張りを宣言するため牽制し合う様子を詠んだものではないか。どの揚げ雲雀も素晴らしい鳴き声を響かせながら天高く飛翔しているさまを詠んでいるのだろう。より高くより速く競って天に入っていく姿は飛べない人間からすればなおさら見事である。

〈配列〉

作者の視点は、地上（27番）から空（28番）へ移った。雉と雲雀とのつながりは、

「ひばりなく中の拍子や雉子の声 芭蕉」(『猿蓑』巻四 春)にも見える。

○春29番の発句

梁うつばりの蠅見付たり春の雨 蚊足

〈作者について〉

作者の蚊足は、生没年未詳。俳書の入集状況は以下の通り。松葉風瀑編『式樓賦』(貞享二年成)に発句2、『貞享三年歳旦集』に歳旦(芭蕉―蚊足―去来)、青蟾堂仙化編『蛙合』(貞享三年刊)に発句1、宝井其角編『新山家』(貞享三年成)に四吟歌仙、立羽不角編『講底なし瓢』(元禄七年成)に発句1。前掲宇都宮讓氏「『続の原』考」も入集状況を記載『俳文学大辞典』に記載なし。

〈語注〉

- ・「春の雨」によって、春。「春の雨はをとしづかにふるともしらぬと読り」、「音なしとよめり」(『浜のまさ』)春「春雨」(『三冊子』(黒冊子)には「春雨はをや小止みなくいつまでもふりつづくやうにする。三月をいふ。二月末よりも用もちる也。正月・二月はじめを春の雨と也」とあり、「春の雨」は「正月・二月はじめ」に降る雨として「春雨」と区別されている。「春の雨」と「蠅」を同時に詠んだ句例は珍しい。『続山井』春之発句上に「しとしとと静もの也春の雨 伊賀上野保川 一笑」とあるのは、春の雨が静かに降る様子を詠んだ例。『笈日記』中巻岐阜部に「何になる虫やらひとつ春の雨 長良 泊楓」とあり、春の雨が降る最中に何かの幼虫を発見したことを詠む。後代の用例だが、『葎亭句集』巻二 春之部に「春雨」と前書して「年越た蚊の出初けりはるの雨」とあり、本句と同様、春の雨が降る日に、冬を越した低体温の虫を見た状況を詠む。
- ・梁 うつばり、と訓む。家屋や橋などの骨組みの一つ。柱と柱の上に渡し、棟の重みを受けて屋根を支えるもの。横木。
- ・蠅 はい、と訓む。『文明本節用集』に「蠅 ハイ」。ここでは冬を越し動きの鈍っている蠅を詠む。低体温のためじっとしているのである。春の蠅を詠んだ作は珍しい。『二えふ集』地 夏に「蠅が扱はいりたいやら障子をば 井筒や 重花」とあるのは夏の蠅を詠んだ例である。

〈句解〉

- ・「梁に蠅がいるのを見つけた、春の雨が降るころ。」
- ・作中人物が天井を見たら、蠅がいた。雨音も蠅も両方とも静かなところが春らしい。

句作において、あまり注目されてこなかった春の蠅に注目した点が新しいといえよう。

〈配列〉

28番は（雲雀の鳴く）晴れた日を、29番は雨の日を詠む。空高く昇る雲雀（28番）に対して、空から降り注ぐ雨（29番）を着想した。あるいは、28番で上に向けた視線を、29番で室内に移したら「梁」の蠅を発見した、という流れだろうか。

○春30番の発句

つばくらの巢にもえ初しすみれ哉

不角

〈作者について〉

作者の不角は既出。春2番を参照のこと。

〈語注〉

- ・「つばくら」によって、春。「燕」については春17番の語注参照。17〜21番まで「燕」句の連続があったので、そこから離れている本句の中心は「すみれ」だろう。
- ・つばくらの巢 燕の巢。荷兮編『曠野後集』八（元禄六年序）に「納蘇利 高麗音取」と前書して「つばくらの巢を別れたる気色哉 鷺雪」とある。
- ・もえ初し 芽吹きはじめた。
- ・すみれ 「すみれは色のむつまじきよし読り。紫は女に比すれば也」、「凡すみれは山野あれたる庭に生るよし也。又、田づら、杜のこかげなどにも読り。いづれもつみて興する心をよめり」（『浜のまさご』春「董菜」とあるように、すみれは色の慕わしさや摘む楽しみを詠む植物とされた。また、『犬子集』巻二 春下に「春雨ややけ野をけしてすみれ草 正章」、『崑山集』巻三 春部に「やかいでも萌もえでた小野のの董哉 大坂正三郎 盛行」、『野ざらし紀行』に「大津に至る道、山路をこえて」と前書し「山路来て何やらゆかしすみれ草」とあるように、すみれは地に生える植物として詠まれてきた。それをここでは、燕の巢にすみれが芽ぐみ始めている、との意外性に着目して詠んでいる。

〈句解〉

「つばめの巢の中にすみれが芽吹いていることよ。」

- ・燕の巢の中に、すみれが芽生えているのを見つけた作中人物が、その感動を詠む。30番の位置からすると本句は「仲春」を詠んだ句と思われるが、燕が南方から日本に

やって来るのは「晩春」で、「堇」も「晩春の景物と考えられるようになってきた」（前掲『歌ことば歌枕大辞典』）とあるので、本句は仲春から晩春にかけての出来事を詠んだ句と解する。燕が巣を作る際に運んできた土の中にでもすみれの種が混じっていたのだろう。親燕や雛の様子を想像して鑑賞するのもよいが、本句の焦点は燕の様子ではなく、すみれである。

〈配列〉

29番の「春の雨」によって生長を促された「すみれ」が30番で芽を吹いたのだろう。